

沈志華著（朱建栄訳）『最後の「天朝」——毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮』上下
（岩波書店、2016年）を評す

2017年7月30日 和田 春樹

1 史料の鬼・沈志華氏の登場

1950年生、1979年中国社会科学院世界史系大学院入学、1992年中国史学会東方歴史研究センターを設立主宰、朝鮮戦争に関するソ連史料の獲得に献身、[1994年エリツィン秘密史料を韓国大統領に寄贈、1995年に米国冷戦史国際プロジェクト、朝鮮戦争ソ連史料を獲得]、成果 著書『中蘇同盟与朝鮮戦争研究』広西師範大学出版社、1999年。『毛沢東・斯大林與朝鮮戦争』第二版、広東人民出版社、2007年。編纂『朝鮮戦争 俄国档案館的解密文件』上中下、台北中央研究院近代史研究所、2003年。論文 Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War, *CWIHP Bulletin*, Issue 14/15, Winter 2003-Spring 2004, pp. 9-25.

中ソ関係資料の獲得と研究へ 著書 主編著 『中蘇関係史綱』社会科学文献出版社、2011年。Zhihua Shen and Danhui Li, *After Learning to One Side: China and its Allies in the Cold War*, Stanford University Press, 2012.

中朝関係史の研究 2009年中国政府関係部門より要請、2011年報告書『寒暖無常——中朝関係の歴史的真相（1945—1965）』完成提出、その後の研究により本書を完成。

2 本研究の特徴

- 1 『『血で結ばれた同盟』という神話を破壊する『驚異の書』』という評価（朱建栄）は「血で結ばれた同盟」とは誰も思っていないし、神話破壊の書になってもいない。資料の集大成をはかる著者の努力は敬服すべきものだが、作品としては問題点がある。
- 2 中朝関係を解明するためには、朝鮮側の文献史料の研究、朝鮮側の認識、行動を十分に考慮することが必要である。しかし、本書はその点に欠落があり、中国の対朝鮮政策の研究にとどまっている。北朝鮮史についての日本、韓国の研究が検討されていない。基本的には金学俊の著書しかみていない。
- 3 下巻部分、1960年から1975年までの過程の分析が平板であり、この時代の各国の運命の激動を十分に説明できていない。
- 4 その結果、本書の最終章、1975年の見方が誤りに終わっている。「1975年4月、金日成は朝鮮半島の武力統一を本気で考えていた」という下巻の宣伝文は学術書としての本書にふさわしくない。

3 序章について

コミンテルン、ソ連共産党、中国共産党の指導と援助によって朝鮮の共産主義運動が誕生し、発展してきて、ソ中両党との関係の中で矛盾を経験するという過程である。この序章には翻訳上の欠陥が見いだされる。朝鮮共産党の在満3グループの一つは「漢上派」は「ソウル上海派」のことである。コミンテルンの史料としては、私が友人と編集刊行した資料集『ソ連共産党、コミンテルンと朝鮮』（モスクワ、2007年）をも利用してくれているのは行き届いている。しかし、金日成らの満州抗日戦争については、中国が内部発行で出した『東北地区革命歴史文件滙集』、甲一～六一、乙一卷、中央・遼寧省・吉林省・黒龍江省当案館、一九八八―一九一年が圧倒的に重要な史料である。この史料は金日成を理解するのに決定的な史料を与えている。

馮康報告書（一九三五年十二月二十日提出）「金日成、高麗人、一九三一年入党。学生、二三歳。勇敢積極。中国語を話せる。遊撃隊員上がりである。民生団だという供述がすこぶる多い。隊員の中で話しをするのを好み、隊員中に信頼尊敬がある（在隊員中有信仰）。救国軍の中にも信頼尊敬がある。政治問題については知るところが多くない。」

この史料の理解が本書では、「救国軍の中で（党に対する）信仰が堅い」など、お粗末である。民生団事件との金日成の関りも説明されず、朝鮮人だけの部隊組織案に対する彼の反対も触れられない。総じて、日本と韓国での満州金日成の活動研究が取り入れられないので、叙述は表面的である。

4 第一章について

ソ連占領下での北朝鮮の改革、建国過程については、ソ連史料をもっともよく使った韓国の研究者の仕事がある。田鉉秀、金聖甫らの研究である。本書はそれを問題にしていない。他方、朝鮮民主主義人民共和国が建国に向かう間、中国の東北革命戦争に与えた援助について、本書はもっとも詳しい叙述を与えている。北朝鮮に帰ったいわゆる延安派を中国共産党がどのようにみていたのかという枢要な点は触れられていない。

5 第二章について

朝鮮戦争については、中朝聯合司令部問題が焦点化している。今日では平壤の祖国解放戦争記念館には、聯合司令部の命令に服するようにとの金日成の1950年12月8日の命令が展示されている。この聯合司令部は「対外非公開」とすることが決定的に重要であった。そのことは本書の筆者は触れていない。

本書では例外的に私の主張が批判されている。註256、43頁である。この点は研究者の間での論争点でもあった。沈志華氏の英文論文でも取り上げられた。1952年の周恩来の訪ソのさいのやりとりである。この点は私はスターリンと周恩来の立場の違い、金日成の主張に対するスターリンの理解と言った点で、筆者の立場は表面的であると考え。私の最終的な主張は英文の著書 *The Korean War: An International History*, Rowman and

Littlefield, 2014, pp. 235-240 にある。

6 第三章「『チュチェ』の提唱」について

1955年末のチュチェ演説があつて、1956年の宗派闘争があつて、中ソの干渉があるという過程が説明されている。この点はランコフの研究、韓国人のソ連史料の獲得もあつて、大いに研究も進んでいる。まずチュチェ演説が1955年になされたのか、これは1960年に発表された作文ではないかという私の問題提起が2005年11月12日の現代韓国朝鮮学会報告でなされ、『北朝鮮現代史』の韓国版（2014年）、台湾版（2015年）に述べられている。これが無視されている。これは目下欧米の研究者もひとしく無視しているので、やむをえない。56年の宗派闘争については、延安派の役割を低める主張をおこない、中国大使館の活動がほとんど影響がなかったという話にしているが、駐留中国軍の存在もふくめて、なお解明されるべき点があるように思う。ミコヤンと彭徳懷による干渉については、中ソの史料を初めて獲得し、これまでの認識を修正することにいたったことは功績であると思う。

7 第四章から第六章まで

この過程は中国が北朝鮮に援助と優遇を与え、両国関係を良好なものにしようとしたものと説明されている。中国人民志願軍の撤退、毛沢東の謝罪、中国東北に対する北朝鮮の関心の承認、長白山に対する北朝鮮の要求への大幅譲歩などが説明される。これらの説明は新しいものである。中国はこの間はソ連との対立が深まり、ソ連の体制は共産主義を否定し、帝国主義に屈服するものだという立場を固め、その世界革命戦略から北朝鮮を自己の陣営に引き入れ、アメリカと対決しようとしたのである。

当時の東アジアにおいて、アメリカと正面から対決し、戦争に突進していったのは、ベトナムであった。北朝鮮は、1960年からソ連中国よりの自立という意味でのチュチェの立場を固めていたが、1965年にいって、ベトナムの動きを念頭に置きながら、世界革命運動の主導権をとる意欲をみせはじめた。この年の金日成のインドネシア訪問とアリ・アルハム社会学院でのチュチェ講演が重要である。1967年5月19日のベトナム大使ホアン・ムイの談話では、ホーチミンは遠からず死ぬ、毛沢東の世界的指導者の役割も終わりに近づいている。ツェデンバルは弱い人物だ。この点で金日成は比較的若く、強い人物であり、10年か15年後には世界とアジアの革命運動の最強の人物となる可能性があるとも見ていた。それが北朝鮮の望みでもあった。65年からベトナム戦争が本格化し、韓国軍が参戦するに至って、北朝鮮は朝鮮半島で革命的な事変をおこし、第二戦線とすることを考えた。そのために国内の体制を「遊撃隊国家」、「首領制国家」（鐸木昌之）に改編し、チュチェ思想を公然化し、唯一思想体系をも打ち出した。そして、68年1月ゲリラの南派とプエブロ号の拿捕を敢行したのである。この動きは、ソ連も中国も巻き込んでいこうという考えによっていたのである。「同床異夢」というなら、ここまでの過程がその表現にふさわしい。この深いギャップがここでは分析されていない。

8 第七章について

第7章に入って、著者は「米中和解の衝撃」ということをおき、その中で、北朝鮮の67年以降の変化について説明する。「米中関係の雪解けより前から、朝鮮の外交政策も水面下で微妙な変化を見せ始めた」というのである。ソ連と中国が北朝鮮の先制攻撃に支持を与えなかったので、「朝鮮政府は軌道修正をせざるをえなくなり」と書いている。

これは疑問である。北朝鮮の南朝鮮革命路線は68年まで試みられたが、みじめな失敗に終わった。ベトナム大使フオン・ムイが、南朝鮮には本格的な革命運動は存在しないと繰り返し、断言していた通りであった。金日成は転換の早い人物であって、ベトナム方式で南朝鮮革命をやることはできないということを69年に結論したのである。

1969年に珍宝島での中ソ戦闘がおこり、毛沢東が突如連米反ソに転換するのである。北朝鮮が72年のニクソン訪中を「ニクソン白旗論」で受け入れるまでには、相当な煩悶があったことだろう。それで決めれば、七・四共同声明の路線を選択したのである。韓国の経済発展をみた北朝鮮は大量のプラント輸入に走り、オイル・ショックで経済的に破産する。北朝鮮は国内体制を固め、経済再建に集中する。世界革命は宣伝の主題となっていく。南朝鮮革命は「韓国民主化運動」の出現によって、北朝鮮としても、新たな研究テーマとなっていたのである。

だから、1975年の金日成の北京演説は韓国朴正熙政権を威嚇したものであり、南朝鮮革命の実践の宣言ではなかったのである。アメリカと手を取った毛沢東に第二朝鮮戦争を支持してくれと頼むほど、金日成は愚かな人間ではない。本書のこの部分で、「1975年4月、金日成は朝鮮半島の武力統一を本気で考えていた」ということを示す文書資料は何もあげられていない。